

銀杏の葉がいっせいに舞い落ちる頃。私が住職を務めているお寺で、一週間の坐禅会を開きました。朝は六時、夜は七時から、坐禅会を開き、一般の方々と脚を組んで坐りました。その坐禅会に、ある男性が来られました。いつも笑顔で多くを語らず、淡々とした方です。座禅会には、毎日車で二十分かけて通って来られました。その男性の熱心な参禅の姿に、私も他の参加者も非常に励まされました。

さて、一週間の坐禅会も終わった次の日。私は用事でお寺を留守にしました。夕方お寺に帰ると、こんな話を聞きました。坐禅会に熱心に来られたあの男性が、なんと今朝もお寺に来られ、本堂の前の庭や石段の落ち葉を、黙々と掃き清めて帰られたということです。「なんと有り難いことか」私は、その男性を拝みたい気持ちでいっぱいになりました。

誰が見ていようがいまいが、の評価を求めず結果を求めず、ただ淡々で行ずることを「陰徳」と言います。禅では、他者の評価に惑わされず、正しい道を求め、地道に真っ直ぐ陰徳を積む生き方が大切にされています。しかし陰徳を積むことは、なかなか難しいことです。私たちは善い行いをすれば、人に知られたい、賞賛されたいと思いますし、つい見返りを求めてしまいがちです。

「一週間皆で坐ったお寺を綺麗にしよう」ただその一心で、人知れず黙々と掃除をされたその男性の姿は、まさに「生きた坐禅の姿」であり、仏の行いと言えましょう。私は男性に坐禅を教えているつもりでしたが、かえって、その男性から、仏の姿「陰徳」の尊さを教わったのでした。